

苦手なことにも継続して取り組む意欲を持つ子

白水幸子

はじめに

J男は、公立小学校より本校小学部6年に編入した頃は、言語障害もあって非常に内向的で口数も少なかった。中学部の3年間での生活単元を中心とした学習は、そんなJ男に身体を力一杯使ったダイナミックな活動を通して自信と学習への意欲を育ませた。しかし、一方ではまだまだ周囲の大人の賞賛を頼りに取り組むといった幼さを持ち、自分自身の障害への認識も希薄で、苦手なことからは逃げようとする傾向があった。

高等部での障害認識を育てる指導は、そのままJ男にとっては苦手で、できたら避けて通りたい内容であった。賞賛を支えに苦手なことに取り組むだけでなく、主体的なものごとに取り組んでいこうとする意欲を育てるための指導の経過を述べてみたい。

1. プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和52年1月1日生 17歳1か月 高等部2年(男)
- ・言語障害、脳性麻痺後遺症
- ・公立の心身障害児学級より本校小学部6年に編入、その後中学部を経て、平成4年度高等部に入
学、現在に至る。
- ・家族は、両親、祖母、兄、弟の6人。

(2) 諸検査による実態 (平成5年5月実施)

① 知能検査による実態

WISC-R 動作性はIQ72と高いが、言語性IQが45以下で測定できなかった。

② 社会生活能力検査による実態

S-M社会能力検査 7.5歳であるが、領域別の意志交換では5.8歳であった。

(3) 行動特性

- ・指示を理解する力はある、慣れた見通しの持てる活動であれば積極的に関わられる。
- ・自分の失敗を恐れ、苦手なことや見通しの立たない場面では指示を受けずに勝手な行動をとることがある。
- ・自分の障害も含めて、友だちの中で自分のできないことが明らかになることは避けようとする傾向が強い。
- ・自主的に自分の思いを話そうとしても言語が不明瞭なために十分伝わらず、友だちや先生に何度も質問してもらい、他に自分の思いを判断してもらうことが多い。

2. 取り組みの構想

(1) 指導仮説

以上の実態をもとに、苦手なことにも継続して取り組もうとする意欲を育てることをねらって、J男にとって最も苦手とするコミュニケーションの面から、仮説を次のように設定した。

個人目標 苦手なことにも継続して取り組む意欲を持つ子

つけない力

- ・言葉が人に分かりにくいことを理解し、障害を少しでも克服しようとする意欲
- ・自分の思いを少しでも相手に分かるように伝えようと工夫する力
- ・文字（平仮名）の習得

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

コミュニケーションの目標

自分のことばを少しでも相手に分かるように伝えようとする子

仮説

自分にできることなら意欲的に活動するJ男であるが、脳性麻痺後遺症のため言語障害を併せ持ち、リズム感に乏しく1字1音が分からず文字が未習得のまま現在に至っている。従って、自己表現は主に運動場面や作業場面で身体を動かすことを通して生き生きと行われることが多い。友人も自分の不明瞭なことばをある程度理解してくれる生徒に限定する傾向が強い。そんなJ男にとって、コミュニケーションからのアプローチはそのまま自分の障害へ直接関わるものであり、かなり抵抗を感じる場面が多いと思われる。しかし、日頃から負担に思っている場面で成功感や成就感を得ることは、J男にとって大きな自信となり自らが苦手なことにも取り組もうとする意欲を育てる。

その他の取り組み

からだ全体の成長や発育の面から、身体を動かす機会を設定し、身体を鍛える。そのために朝の活動への取り組みを始めとして、諸活動の中でも身体を動かす活動が中心的役割になるようにする。児童生徒会活動へも積極的に関わらせ、責任ある仕事を体験させることで友だちの中での自分の位置を確認させ自信をつけさせる。

(2) 指導方針

- ① 生活全般を通してことばの言い直しをする場面や発表の機会を増やす。
- ② 言語の抽出養護・訓練を通して、構音の指導メニューを作成し実践する。
- ③ 文字が未習得の実態を受け入れさせ、課題学習や自主学習を通して平仮名の習得を図る。
- ④ 日常生活の中に自らが構音訓練をする時間を設定し、自分の障害を意識し少しでも克服しようとする自主的に取り組ませ、構音訓練を生活の中に取り込むようにする。

3. 指導の実際

(1) 課題学習

① ねらい

- ・自分の言語が不明瞭であることを意識させ、構音指導のための個別のメニューに沿って個別指導

を行う。

- ・簡単なことばの聞き取りをして文字への置き換えをさせ、平仮名の習得を図る。

② 実践例（個別メニュー）

	指 導 内 容	そ の 時 の 様 子
うがい指導	<ul style="list-style-type: none"> ・コップから水を含んで吐く。吐く時には唇を尖らせて水鉄砲のようにして吐く。 ・口中に水を含んだ状態で上を向き、その状態で10秒以上我慢する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中3、高1と今までに経験のあった内容であり比較的正確にできるが、水を含んだ時、口がきちんと閉まらないために口の端から水がこぼれる。
口形模倣 構音復唱	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の口の形を模倣する。 ・自分の口の形を鏡に映して確認し、指導者の口の形を模倣する。 ・簡単なことばを指導者の口の形を見ながら復唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導者の口の形を模倣するが、自分の口の形が意識できていないために、どの程度口を開ければよいか分からない。指導者の顔の隣に鏡を置いて自分の顔を映すと、ある程度は正確にできる。
ことばの聞き取り	<ul style="list-style-type: none"> ・「おはようございます」「こんにちは」といった日常の挨拶、身近な人の名前、身近な物の名前を聞き取り、平仮名文字に置き換える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・正しく聞き取っても、表記段階になると5文字のことばが4文字になるなど、表記できない。 ・ことばの省略が多いので、ことばと一緒に拍打ちをしたが、4音から5音になると不安定になる。

視写であれば平仮名をはじめとして簡単な漢字もきちんと書けるJ男であるが、聞き取りから自分で表記する場合には書けないことが多い。平仮名文字が全部習得できていないこともあるが、ことばを構成している音の数が聞き取れなかったり、1字1音が十分に理解できていないことも原因になっている。養護・訓練の言語訓練士から文字指導は控えた方が良いという指摘があり、個別メニューから平仮名文字に置き換える内容は削除している。今後も養護・訓練の言語訓練との連携を図りながらJ男の実態に即した個別メニューを作成し、継続して指導を行っていきたい。



うがいをするJ男

(2) 職業科（コース制）

① ね ら い

- ・ある程度設定された場面の中で、自信をもって自分の思いを表現させる。
- ・作業に見通しを持ち、状況に応じて適切な応答ができるようにさせる。
- ・簡単な報告のことばであれば相手に分かるように話させる。

② 実践例（印刷班での取り組み）

平仮名文字が未習得なJ男であるが、文字を扱うことへの期待感を持っている。そこで、文字を習得するのではなく、記号と認識させる中で、活版文字の返しの作業を担当させた。個別に漢字を構成する偏や旁をある程度教えたり、鏡文字を指導していった。また、印刷班の班長として、友だちの中で自分の考えを発表したり、友だちに指示を与えたりする場面も設定していった。

作業に慣れるに従って作業の流れをつかみ、設定された場に応じて「分かりません。」「できました。」「次は何をしたらいいですか。」等の報告が自主的にできるようになっていった。しかし文字を記号



活版文字の返しをするJ男

として扱うとはいっても、文字の組み立てが理解できない実態においては、活版文字の返しの作業も友だちの2倍から3倍の時間を要した。自分が友だちと比べてできないことが多いということが認識されるに従って、報告場面でははっきりと表現できるJ男も、具体的な作業場面では自信を失っていった。そのようなJ男の実態を検討し、2学期からは職業科のコースを印刷班から農耕園芸班に組み替えた。

J男にとって印刷班での学習は、自分にできること、できないことが明確になり、自分の適性を考えるいい機会になった。本来、身体を力いっぱい動かすことで自信を育ててきたJ男である。自分の適性を考えることを通して、農耕園芸班での学習がより積極的で自信に充ちたものになっている。

(3) 日常生活の指導

J男の言語障害への取り組みが学校卒業後も継続してできるように、日常生活の指導としても構音指導を取り入れた。養護・訓練の「口の体操」のメニューに従って、登校後、毎日鏡に向かって訓練をさせた。最初は1対1で指導を行い、メニューを覚えた段階で本人の自主性に任せるようにした。

教室で行うようにしたために、友だちのことが気になって自主的には取り組むことが難しい状況であったが、根気強く確認を取ることで、短時間であれば一人で取り組むことができるようになった。一方でメニューの中の苦手な項目については勝手に省略するといった面もあり、定着までにはまだまだ時間がかかる。学校での取り組みが習慣化された段階で、家庭との連携を図り、家庭生活に取り込むようにしたい。

4. 考察と今後の課題

高等部2年のJ男に構音指導するだけでは、言語が不明瞭な現在の実態を軽減することは難しい。大きな課題の一つである文字の習得についても、現段階では取り組みも控えている状況である。毎日の生活の中で、繰り返し言い直しを求められる状態を受け入れてきてはいるものの、設定された場面以外では、自分から意識して相手に分かるように話すまでには至っていない。従って、J男へのコミュニケーションに視点をあてた取り組みは、本人の障害認識を育むことによって、少しでも相手に自分の思いを伝えるためにはどうすればよいかを模索させる段階に止まっている。

周囲の賞賛を支えに活動してきたJ男にとって、自分自身を見つめ、自分と向き合う学習は苦手な辛い面もあったと思われる。コミュニケーション場面での成就感や失敗体験に翻弄され、精神的にも動揺した時期もあった。しかし、自分自身と対峙する経験がJ男を、たくましく成長させるものと捉え、今後は言語以外のより具体的な伝達手段も検討し、併せて指導していきたいと考える。